

6. 義に飢え渴く者は幸いです。その人は満ち足りるから。

説教

これはイエスさまの山上の説教の一節です。

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

ガリラヤで宣教の第一声を上げたイエスさまのもとへ、病に苦しむ病人や悪霊に憑かれた人、噂を聞いた大勢の群衆がやってきます。ぞろぞろと付き従って来る彼らを引き連れながら、イエスさまは山に登り、彼らに真理を教ええました。それが山上の説教(垂訓)です。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだから。

悲しむ者は幸いです。その人は慰められるから。

柔和な者は幸いです。その人は地を相続するから。…」

という具合に、まずは神の国の幸いが一つ一つ教えられていきます。

「幸いです」と訳される言葉 **maka, rioi** の意味は、「祝福されている、幸せだ」で、いずれの場合にも文頭に語られます。あえて訳すと「おめでとう！（何と幸せな者たちだ！）心貧しき者らよ！」となるでしょう。この時イエスさまに付き従ってきた病人たちのように、イエスさま以外に頼るものの無い心の貧乏人たち、罪深く惨めな自分の現実を嘆き悲しむ者たち、そして、あらゆる迫害や困難に耐え、ひたすらへりくだって謙遜に神さまの御心を全うする者たちはこの上なく幸せ者だということです。なぜなら、彼らは慰めを受け、世界を相続し、さらには天の御国に入ることができるからです。

この上なく祝福された幸いな者のリストの四番目に挙げられたのが「義に飢え渴いている者」です。「義 **dikaiosu, nh**」とは神さまとの正しい関係にある状態を意味します。かつて見た映画の中で、中国奥地で伝道したハドソン・テーラーが、「義」とは「羊」なるキリストの下に「我」が位置する正しい関係を意味すると伝道していました。全くその通りです。元来、人は、神さまに背く罪のゆえに天の御国に入ることができません。しかも、次のみことばが示す通り、この世に義人はひとりも存在しません。「義人はいない。ひとりもいない。」(マタイ 3:10)人は生まれながらにして神さまに背き、そのままでは誰ひとり例外なく天国に入ることができず、地獄に行かなければなりません。「義」が無ければ、あるいは「義」を持っていなければ、天国に行くことができないのです。この事実を、私たち罪人は知らなければなりません。

同じ山上の説教の中で、イエスさまはこうも言われました。

「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、

あなたがたは決して天の御国に、はいれません。」(マタイ 5:20)

「律法学者やパリサイ人の義」とは、「律法学者」は知識に於いて、「パリサイ人」は行動に於いて、人間がないうる限り最高限度の「義」を意味します。でも、イエスさまは、その程度の「義」では天国に入ることができないと言われます。たとえ律法の知識を極めても、あるいは死ぬほど律法を実践しても、それでも天の御国に入るには全然足りないということです。人の目はごまかせても、神さまの目はごまかすことができない、というわけです。天の御国に入るには、「律法の中の一点一画」残さず「全部」を成就する完璧な「義」がなければなりません。そ

れは、要するに、「人間の義」をはるかに超越した、「神の義」というべきものです。神の律法を一点一面残さず全部を完璧に全うする「神の義」がなければ、人は絶対に天国に入ることができません。それでは、いったい誰が天国に入ることができるのでしょうか。

「義」の問題で苦悶し苦闘した人物がいました。16世紀宗教改革をヨーロッパにもたらしたマルティン・ルターです。1505年、法律家を志していた21歳の時に、実家から大学へ戻る途中で落雷に遭い、一緒にいた友人は急死します。死の恐怖に襲われたルターは、思わず「聖アンナさま、お助けください。私は修道士となります。」と叫んで、アウグスティヌス派の修道院に入ります。彼を迎えた院長は尋ねます。「わがままの放棄、少量の食事、粗末な服装、夜間の祈祷と昼間の労働、禁欲、貧乏の不名誉、乞食の恥辱、修道院生活の味気なさという重荷を、あなたは喜んで背負う備えがあるのか？」すると、ルターは答えます。「はい。神のみ助けによって、人間の弱さの許される限り。」ルターは自らが義人に到達すべく修道院のあらゆる苦行を全うします。しかし、どんなに修道院のプログラムをこなしても、少しも平安がありませんでした。圧倒的な神の聖さと権威の前に、ただもう自らの罪深さと無力さを思い知らされて打ちのめされる日々を過ごしたのです。

ミサ(礼拝)で「我らは、生ける、まことの、永遠のおん神に、ささげたてまつる」と祈祷文を朗読する時には、あまりの恐ろしさに「全く茫然として、恐ろしさに震えわなな」きました。「すべての人々は、この世の君の面前でさえ震えずにはいられないのに、いったいどんな舌で、私はこういうお方に対して話しかけるのだろう。神の権威に向かって目を上げ、手を上げる私は、そもそも何者なのだろうか。天使たちが彼を取り囲んでいる。彼がうなずきたまえば、大地は揺れ動くのだ。それに、哀れな一寸法師の私が『私はこれがある、私はそれが欲しい』と言うのか。私は塵や灰に過ぎず、罪に満ちていながら、生ける、永遠のまことの神に、話しかけているではないか。」そうして、聖なる神への恐れに打たれ震えおののきながらやっとの思いでミサを全うします。

たびたび三日間の断食して徹夜祈祷をし、毛布を着ずに死ぬほど凍えながら夜を過ごして、「私は今日は何も悪いことをしなかった」と安堵しました。しかし、すぐに「果たしてお前は本当に十分に断食したのか。お前は本当に貧乏なのか」との疑惑が沸き起こり、さらに徹底して苦行に没頭します。その時のことをルターは後にこう回顧します。「私は善良な修道士だった。私の修道会の規則を実に厳格に守った。それだから、もしも修道士で、修道士生活によって天国に到達する者があるとすれば、それは私だったとすることができる。私を知っている修道院の私の兄弟たちはみなそれを証明するだろう。もしも私があれ以上続けていたなら、私は徹夜や祈りや朗読やその他の聖務で、自分自身を殺してしまったに相違ないのだ。」

ルターの最大の悩みは、彼がいかなる点に於いても神のみこころを満たすことができないということでした。山上の説教についても、人に腹を立てることも許さぬ「このみことばは崇高すぎるし、難しすぎて誰もこれをやり遂げることはできない」と言います。一日に幾度となく自分の罪を懺悔し、六時間も続けて懺悔する時もありましたが、思い出す罪を片っ端から懺悔すればするほど、自分の中にある、より一層根本的な徹底的な邪悪さ、すなわち人間の本性の腐敗に気づかされ、恐怖に襲われて精神が混乱しました。そのような魂の苦闘の日々の中、詩篇 22編から、義人でありながら私たち罪人の身代わりとなって罪人の死を十字架で死なれたキリストの死を考察し、それからさらに、ローマ書で引用されている「義人は信仰によって生きる」とのみことばによって、罪を一つ残らずさばかれる神さまは、同時に、キリストの義を恵みにより信仰によって与えてくださるお方でもあることを悟り知るに至るのでした。「日々私は思索し、遂に私は、神の義と、『信仰による義人は生きる』というみことばとの関連を見つけた。それから、私は、神の義が、それによって恩恵と全くの憐れみから、神が信仰を通して我らを義としたもうところの正しさである、ということを理解した。そこで私は、自分が生まれ変わって、開いている戸口からパラダイスへ入ったのを感じたのである。聖書全体が新しい意味を持つに至った。以前には『神の義』が私を憎

悪で一杯にしていたのに、今ではそれが私に一層大きい愛のうちに、言いようもない快いものになった。このパウロの一句は私には天国への扉になったのである。」

ルターは、「神の義」という言葉を、神が罪人をさばかれる義と解釈していました。そのため、彼にとっては義なる神は罪人を審判して地獄へ投げ落とす「審判者」「さばき主」です。そうとしか理解することができなかったのです。それで、落雷によって死ぬほどの恐怖に打たれてから、自分の罪をひとつ残らずさばかれる審判者である義なる神の前にひたすら脅え続けていたのです。何をしても平安がありませんでした。どんなに礼拝しても、どんなに聖書研究をしても、どんなに断食をしても、どんなに罪を懺悔しても、ローマに巡礼しても、聖人の遺物を崇拝しても、全然平安がありません。なぜなら、神は義であり、自分は罪人だからです。どんなに努力しても、どんなに苦行しても、どんなに心頭滅却しても、罪人は罪人のままです。義人になることはできません。聖なる神は厳然とそして超然と高くそびえ立ち、惨めな罪人を見下ろして、罪人の罪を一つ残らず断罪してさばこうとしています。ルターは「神の義」をそのように理解したのです。というより、そのようにだけ理解したのです。確かに、それは神さまを理解する上で重要な理解です。神は義なるお方であって、何者にもまして高くいまし、罪人を容赦なくさばかれる世界の審判者です。これは「義」を意味するギリシャ語 **dikaïosu, nh** の一つの意味です。それは justice、つまり、裁判官が適切な判決を宣告する場合の法律の厳格な執行です。しかし、同時に、「義」を意味するギリシャ語 **dikaïosu, nh** にはもう一つの意味があります。それは justification の意味で、裁判官が宣告を見合わせて、刑事被告人に宣誓させた上で釈放することです。その際に彼に対する信頼と個人的関心を述べて、それによって改心することを期待するというものでした。つまり、「義 **dikaïosu, nh**」には、恩情とか憐れみの意味もあるのです。ルターはそれに注目しました。そして、義なる神のもう一つの顔、それはキリストに於いてあらわれている神の義に注目したのです。

キリストは「律法を成就するために来た」と言われました。律法の一点一滴も余すところなく成就なさったお方です。キリストこそ人類唯一の義人です。その義人が罪人の死を死なれました。十字架に架けられて、父なる神のさばきを受けて、父なる神に見捨てられて、死んだのです。いったいどうして？義人なのに、どうして十字架で罪人の死を死ななければならなかったのでしょうか。父なる神に見捨てられる罪人の死です。アダム以来全人類がこの死を死ななければならない、罪人の死です。

どうして 100%父なる神に従い抜いたキリストが、神に背く罪人の死ななければならなかったのか。それは、私たちの身代わりの死でありました。私たちの身代わりに父なる神に見捨てられて、最後の審判、地獄のさばきを受けてくださった、そう考えるしか、考えようがない、全く理解不能だけれども、そう考えるしか説明がつかない、そして、この不可解な事実を、ただ信じて受け入れることによって救われます。つまり、「義人は信仰によって生きる」のです。父なる神さまは、キリストを信じるすべての者に「神の義」を与えて、信仰によって義と認めて、地獄の滅びから救ってくださるというローマ書3章のみことばに救いを見出したのです。「信仰によって与えられる義」とそこにパウロはちゃんと書いてあります。信じるすべての者に与えられるのであって、何の差別もない、というのです。

「義に飢え乾く者は幸いです。その人は満ち足りるから。」

イエスさまは、「義人となる者が幸い」と言われたのではなく、「義に飢え渴く者が幸い」だと言われました。神を知らぬ者は義に飢え渴くことはありません。自分勝手に、あるいは他人と比較して自己満足している以外ありません。神さまが見えないので、人しか見えません。しかし、神を知るものは必ず義に飢え渴きます。そして、神の聖さと自らの罪深さを思い知らされて、「義」に飢え乾く者こそが幸いなのです。なぜなら、神さまが、キリストに於いて全うされたご自身の義をその人に満たして、天の御国に入れてくださるからです。

「満ち足りるから」とは、受け身の未来形で書かれています。神さまが、満たして下さるのです。「義」を、「キリストの義」を、「神の義」を、満たして下さいます。100%父なる神さまに従う完全無欠な神の義を、義に飢え渴く者に満たして下さいます。そうして、ご自身の義を満たして、天の御国に入れて下さるのです。